

ことばの迷い道

ことばの？を渡り歩く

ことばの藪知らず

よしおかのぼる
吉岡 乾

民博 人類基礎理論研究部

クレタ島の、ミノータウロスが幽閉されていた迷宮をご存知だろうか。彼の封じられていたそれは、ミューケーンイ語で「da-pa-ne-to」[「トキヤト」]、後に古代ギリシア語で「ラビュリントス」[「Λαβυρινθος」]とよばれていたが、英語での「ラビリンズ」の名が日本ではポピュラーだろう。

迷宮というと、曾て一九八〇年代に流行ったような、入り組んだ、分岐が多くて行き止まりばかりの、道に迷わせるための構造を想像するかも知れない。いわゆる迷路である。けれども、こちらは英語では「メイズ」。ラビリンズとは別物である。なお、類似概念としてゲームなどで頻繁に登場する「ダンジョン」とは、地下牢のことだ。

迷宮は、方向を失わせるように右へ左へと迂余曲折するが、基本的には一本道で、目的地に近付いたり離れたりしてしまうような作りの構造物という。けれども、先行きの長さは計れずとも、決して道に迷うことはない。道に迷うことはできない。迷路とは理念が一八〇度異なっている。

他の分野と違わず、言語の研究は一筋縄ではないもの。そもそも、言語を調査するのに、言語を用いて探究しようとするのだから話が厄介だ。フィールド調査では、未知の言語を知るために、その言語の使用者と、調査者とのあいだで、互いに知っている別の言語を用いることが一般に多くある。そういった言語を、媒介言語という。例えば筆者は、ドマーキ語を知るために、ブルシヤスキー語を媒介言語として調査している。ブルシヤスキー語の調査は初めのうち、ウルドゥー語

を媒介としていた。

例えば話を平たくするために、英語を媒介に用いて日本語を調査すると考えてみよう。単語調査で、「ライス」[「rice」]を日本語で何と言うかと訊かれたら、何と答えるか。「米」か。だとしたら、「田圃に米が植わっている」とか、「ほかほかの米を食べる」などと、自然発語で言うだろうか。

何等かの言語現象が立ちあらわれたとき、それが対象言語の特徴なのか、媒介言語の招いた不具合なのか、留意する必要がある。

現代英語の二人称代名詞は、単複も男女も区別しない。「ユー」[「you」]を含んだ例文を和訳してくれと言われたとき、「あなた」と訳すだろうか。「おそれとも」「あなたがた」と訳すだろうか。「おまえ(たち)」「や」「君(ら)」は間違いか。幾つも幾つも訊かれて、毎度毎回、単数が複数かと区別して訊いたり、登場人物の関係性はどうかとかと伺って答えたりしなければならぬのは大変に億劫だろう。男女で動詞などの活用形が変わる言語なら、ユーの指す者の性別も重要だ。

言語の構造は奥深い。わけ入ってもわけ入っても未知が続く、八幡の藪知らずのように、踏み入れた者は二度と出て来れない、終着点へと辿り着けないのではないかと懼れるほどである。「だからこそ楽しい」などと言語学者が言うこともあるが、強がりでなければそれは、言語探究の道が闇雲な迷路ではなく、巨視的に、いずれ最奥部に行き着く迷宮の構造だと信じているからなのかも知れない。